

京房「八宮積算法」試論

辛 賢

一 はじめに

京房（字君明、前七七く前三七）は、前漢の代表的易学者として著名である。彼の著述として今日現存するものは、呉の陸績によつて注が施された「京氏易伝三巻」が唯一のものである。その書名には「易伝」と記されているものの、実際には『易経』の解釈書ではない。それはもつぱら六十四卦の構造をめぐつて、京房独自の原理・理論を展開したものであつた。そしてその『京氏易伝』は、八卦を枠組みとする『馬王堆漢墓帛書周易』と、その卦序構成において密接な関連をもつものでもあつた⁽¹⁾。しかし、実はこのような卦序の構造的特徴は、『京氏易伝』においては氷山の一角にすぎないものである。そして『京氏易伝』における六十四卦メカニズムはいまだに全面的かつ根本的な解明は得られていないのである。

さて、『京氏易伝』において六十四卦組織の根本を形成する技法は「積算法」と呼ばれるものである。しかし積算法は、難解であるため従来踏み込んだ分析は行われてこなかつた。鈴木由次郎著『漢易研究』（明徳出版社、一九六三年）も「積算」には言及しているものの、その本格的な内容に関してはあまり踏み込んだ論証になつていない。

しかし、筆者の見るところ、京房易における積算法は、まさに最後の切り札ともいうべき技法であつて、これを明らかにしなければ、京房易の全体像を知ることが不可能のもののように考えられるのである。

そこで、本稿では、京房の技法について詳しく論じている、民国の徐昂著『京氏易伝箋』⁽²⁾を参照しながら、京房の八

宮六十四卦における積算法の分析を試みたい。

二 建月

『京氏易伝』の六十四卦の順序は、独特なものである。序卦伝の順序でもなく、また『馬王堆漢墓帛書周易』の順序とも異なる。『京氏易伝』は、上巻に乾・震・坎・艮の四宮（陽宮）、中巻に坤・巽・離・兌の四宮（陰宮）と、大きく陰陽の二部に分けられ、全八宮のグループをなしている。そして八宮（八純卦）各々に一世から五世および遊魂・歸魂までの七世卦を配当する。これを図表にしたものが、 \wedge 図表1Ⅴである。

このような八卦を枠組みとする構造は、『馬王堆漢墓帛書周易』の八八六十四卦の構造と非常に近いものであり、 \wedge 図表1Ⅴの下段に示されるように数理的規律性を厳格に表している。この点についてはすでに別稿で述べているので、ここでは省略したい⁽³⁾。この八宮世応における六十四卦の構造は、八卦の世変を六十四卦に押しひろげて、その六十四卦における卦変を法則的に示すものであるといえる。そして、その法則性は表面的に見えるような単なる辻褃合わせというわけではなく、実はさらに六十干支および一年十二ヶ月二十四気をもそこに組み込みうるものであった。それは、以下に述べる積算法から汲み出されるいくつかの卦氣占候の法則性の一種と捉えられるものといえるのである。

そこでまずは、乾宮の世卦における六十干支の配当とはどのようなものであるのかを探ってみよう。

『京氏易伝』巻上、「乾」の条に「積算己巳火に起り、戊辰土に至る。周りて復た始まる。……建子潜龍に起り、建巳極に至りて亢位を主どる」とある。これは実は乾卦における、干支にもとづく積算法を説くものである。「積算」については、

<図表1> 八宮世応図表

旁通卦(変卦)

本宮	1乾☰	9巽☴	17坎☵	25震☳	33坤☷	41巽☴	49離☲	57兌☱
一世	2姤☱	10豫☱	18節☶	26賁☶	34復☱	42噬☱	50旅☱	58困☱
二世	3遊☱	11解☱	19屯☵	27精☱	35臨☱	43訟☱	51鼎☱	59萃☱
三世	4否☷	12恆☱	20睽☱	28損☱	36泰☱	44益☱	52暌☱	60咸☱
四世	5觀☱	13升☱	21萃☱	29睽☱	37壯☱	45旅☱	53蒙☱	61蹇☱
五世	6剝☶	14井☱	22豐☱	30履☱	38夬☱	46睽☱	54渙☱	62謙☱
遊魂	7晉☱	15噬☱	23睽☱	31解☱	39需☱	47頤☱	55訟☱	63噬☱
歸魂	8噬☱	16隨☱	24師☱	32漸☱	40比☱	48蠱☱	56訟☱	64睽☱
第一段	28/20 一8多	20/28 --8多	20/28 --8多	28/20 一8多	20/28 --8多	28/20 一8多	28/20 一8多	20/28 --8多
第二段	48/48 乾±0		48/48 坎±0		48/48 坤±0		48/48 離±0	
第三段	96/96 乾±0				96/96 坤±0			
第四段	192/192 易±0							

宋の晁公武が次のような説明を行っている。

數以紀月者、謂之建。終之始之極乎。數而不可窮、以紀日者謂之積。（『京氏易傳』卷下）

これによれば、積算とは「建」と「積」と、盾の両面のように捉えられ、「建」は月に關係し、「積」は「日」に關係しているという。これについて陸績は、「吉凶の兆、年を積みて月を起こし、（月を積みて日を起こし）日を積みて時を起こし、時を積みて卦を起こして本宮に入る」（『京氏易傳』卷上「乾」陸績注）と述べ、「建」と「積」とは、年・月・日・時においてパラレルな關係であると述べている。晁公武の説明は、まず「一年」という前提の上で説いたものと見られ、そのなかで「建」は月をおさめる者であり、「積」は当月の日数をおさめるものとするものである。そしてこれによれば、「建」は建月と「積」は積日の關係は、「建」月の後に「積」算が起こることになる。要するに積算法とは、建月と積算の二段階を結合したものであることになる。そこでまず、「建月」とはどのようなことなのか、それを確かめておきたい。

「建月」とは、十二辰を十二ヶ月に当てたもので、建子（十一月）・建丑（十二月）・建寅（正月）・建卯（二月）・建辰（三月）・建巳（四月）・建午（五月）・建未（六月）・建申（七月）・建酉（八月）・建戌（九月）・建亥（十月）の十二ヶ月を意味する。すなわち、前掲の「建子潜龍に起り、建巳極に至りて亢位を主どる」とは、「建子」から「建巳」、すなわち子・丑・寅・卯・辰・巳の六辰の月が乾の六爻に組み込まれるということである。このことを徐昂は次のように説明している。

建月六辰、分配六爻。建始一辰受氣。中間經歷四辰皆積氣、末一辰成象立體。（『京氏易傳箋』では卷三「建候積算」）
 乾は建子の月である甲子十一月にはじめて卦氣（陽氣）を兆し、建丑（乙丑）・建寅（丙寅）・建卯（丁卯）・建辰（戊辰）の月を経て次第に陽氣を積んでゆく。そして最後の建巳の己巳四月に至り、「末の一辰は象を成し體を立つ」と、ようやく乾の卦体（卦象）が成立することになる。つまり、乾卦が建子・建丑・建寅・建卯・建辰・建巳の月にわたって六ヶ月をつ

かさどるのである。最後の建巳の時は、乾卦の陽氣が極まると同時に、陰氣が兆し始める時期ともいえる。

つまり「建月」とは、陸續注に「十一月の冬至に一陽生ず。四月に龍、辰に見わる。陽極まり陰来る」とあるように、建子十一月、建巳四月の六ヶ月間の、乾の卦氣（陽氣）の生成・尽滅が行われる時期である。「京氏易伝」本文にあった「建子潜龍に起り、建巳極に至りて亢位を主どる」とは、以上のようなことを意味しているのである。

『京氏易伝』における八宮六十四卦は、実はこれと同様にすべて六ヶ月ずつの月をつかさどる仕組みになっているのである。それを順次に組み立てると、△図表2Vのようになる。

まず、この図表は両側に六十甲子・五行・二十四氣を順々に並べ、そこに各月々に対応する六十四卦を組み立てたものである(4)。各卦の横に示した番号は爻位を示す(ただ、初爻と上爻はそれぞれ「1」と「6」に置き換えた)。各卦ごとに爻位の並び順が錯綜していることがみえるが、これは建始が卦の世位より起るからである。すなわち、△図表1Vの乾宮の一世姤卦は初爻が建始(建月の最初の月)にあたり、二世の遯卦は二爻が建始にあたり、三世の否卦は三爻が建始にあたるのであり、以下五世、そして遊魂・歸魂の六世・七世となるのである。こうした一連のメカニズムについて徐昂の解説を参照してみる。

從世位之爻數計起。如乾宮建始甲子、與初九千支相符。值十一月節大雪至己巳、值四月中小滿。世位在上九爻。上九建甲子、當十一月大雪冬至兩節。初九建乙丑、當十二月小寒大寒兩節。九二建丙寅、當正月立春雨水兩節。九三建丁卯、當二月驚蟄春分兩節。九四建戊辰、當三月清明穀雨兩節。九五建己巳、當四月立夏小滿兩節。乾宮之遯卦建始辛未、從第二爻世位計起。六二當六月中大暑、陶歷一節。九三壬申、當七月立秋処暑。九四癸酉、當八月白露秋分。九五甲戌、當九月寒露霜降。上九乙亥、當十月立冬小雪。初六丙子、當十一月節大雪、亦陶歷一節。

日期	姓名	性别	年龄	籍贯	职业	住址	备注
1-23	王长文	男	45	山西	工人	太原	
1-24	王长文	男	45	山西	工人	太原	
1-25	王长文	男	45	山西	工人	太原	
1-26	王长文	男	45	山西	工人	太原	
1-27	王长文	男	45	山西	工人	太原	
1-28	王长文	男	45	山西	工人	太原	
1-29	王长文	男	45	山西	工人	太原	
1-30	王长文	男	45	山西	工人	太原	
1-31	王长文	男	45	山西	工人	太原	
2-1	王长文	男	45	山西	工人	太原	
2-2	王长文	男	45	山西	工人	太原	
2-3	王长文	男	45	山西	工人	太原	
2-4	王长文	男	45	山西	工人	太原	
2-5	王长文	男	45	山西	工人	太原	
2-6	王长文	男	45	山西	工人	太原	
2-7	王长文	男	45	山西	工人	太原	
2-8	王长文	男	45	山西	工人	太原	
2-9	王长文	男	45	山西	工人	太原	
2-10	王长文	男	45	山西	工人	太原	
2-11	王长文	男	45	山西	工人	太原	
2-12	王长文	男	45	山西	工人	太原	
2-13	王长文	男	45	山西	工人	太原	
2-14	王长文	男	45	山西	工人	太原	
2-15	王长文	男	45	山西	工人	太原	
2-16	王长文	男	45	山西	工人	太原	
2-17	王长文	男	45	山西	工人	太原	
2-18	王长文	男	45	山西	工人	太原	
2-19	王长文	男	45	山西	工人	太原	
2-20	王长文	男	45	山西	工人	太原	
2-21	王长文	男	45	山西	工人	太原	
2-22	王长文	男	45	山西	工人	太原	
2-23	王长文	男	45	山西	工人	太原	
2-24	王长文	男	45	山西	工人	太原	
2-25	王长文	男	45	山西	工人	太原	
2-26	王长文	男	45	山西	工人	太原	
2-27	王长文	男	45	山西	工人	太原	
2-28	王长文	男	45	山西	工人	太原	
2-29	王长文	男	45	山西	工人	太原	
2-30	王长文	男	45	山西	工人	太原	
2-31	王长文	男	45	山西	工人	太原	

八五七十四号 每月 租 簿

「世位の爻より、數、計り起る」とあるように、建月は卦の世爻より起こるわけだが、たとえば、乾宮では、首卦乾卦は上爻（上九）が世爻であることから、上九（図表では「6」と示す）は甲子十一月（大雪・冬至）に当たる。次に初九に周回し、乾の初九は乙丑十二月（小寒・大寒）に建ち、次いで九二は丙寅正月（立春・雨水）に建ち、九三は丁卯二月（驚蟄・春分）に建ち、九四は戊辰三月（清明・穀雨）に建ち、九五は己巳四月（立夏・小滿）に建つことになる。したがって、乾卦六爻は一爻に一ヶ月ずつ、すなわち甲子十一月から己巳四月のおよそ六ヶ月間をつかさどることになるのである。

もう一つ例を挙げる。遯卦は乾宮の二世卦に当たる。そこで、建月は第二爻（六二）から起る。したがって、六二は辛未六月（大暑）に建ち、九三は壬申七月（立秋・處暑）に建ち、九四は癸酉八月（白露・秋分）に建ち、九五は甲戌九月（寒露・霜降）に建ち、上九は乙亥十月（立冬・小雪）に建ち、初六は丙子十一月（大雪）に建つ。したがって、遯卦は「六二に建始し、初六に終結」し、辛未六月より丙子十一月に至るおよそ六ヶ月をつかさどることになる。

以上のように△図表1∨の八宮六十四卦の、表面上に見える構成は、実は△図表2∨のような巨大な歴算構造を基盤に、その上に秩序づけられているものなのである。それは卦の世位（世爻）より月を起こし、一爻に一ヶ月ずつ、一卦に六ヶ月を配当するというものであった。しかも、△図表2∨をみるとわかるように、これらの卦と卦との関係については、某卦から某卦へと次々と連続的に建月が起こるようになっており、その構造はまるで折り疊んだパイ生地のように重層的構造をなしているのである。

また、徐昂は八宮における宮と宮との関係について、

建始甲午、後乾卦甲子三十辰。乾坤建始、天干皆在甲也。坤陰胎於芒種、夏至一陰生。起於五月午、盡於十月亥。從世位上六爻肇始甲午。受氣當五月節芒種、至己亥成正象爲辟卦。當十月中小雪。（『京氏易伝箋』卷二「坤」）

と述べている。坤の建始は甲午五月であり、これは乾卦の建始の月の甲子より三十辰を経た、ちょうど六十甲子の半分にあ

たることになる。そして両卦は「甲子」と「甲午」と天干をともししている。このように建始の天干が共通しているのは、乾・坤だけではない。

乾坤同在甲、震巽同在丙、坎離同在戊、艮兌同在庚。甲丙戊庚、陽剛天干相間而居。建始地支、陰陽各相同。乾震同在子、坎艮同在寅、坤巽同在午、離兌同在申。子寅午申、陽剛地支亦相間也。午與子、申與寅、皆隔六相對。

（『京氏易伝箋』卷三「建候積算」）

このことを八図表2Vを参照しながら確かめてみる。陽宮震の建始は「13丙子十一月」、陰宮巽の建始は「43丙午五月」である。すなわち、震の建始より三十辰を歴て巽の建始が起り、ともに「丙」の天干によって対応する。陽宮坎の建始は「14戊寅正月」、陰宮離の建始は「44戊申七月」ということで、これもまた間に三十辰をおき、ともに「戊」の天干によって対応する。陽宮艮の建始は「23庚寅正月」、陰宮兌の建始は「53庚申七月」となり、やはり間に三十辰を歴て、ともに「庚」の天干によって対応する（6）。すなわち、八宮構造は、乾と坤、震と巽、坎と離、艮と兌を中心として甲・丙・戊・庚の陽干によって四分されていることになる。このような宮間の対応関係は、八図表1Vの卦変（旁通卦）においても同様の対応をなしている。

一方、これを地支（十二辰）の側から照らしてみる。徐昂『京氏易伝箋』卷三に、

震卦後（乾）卦十二辰、建始丙子。巽卦宜後坤卦十二辰、建始丙午。艮卦後坎卦十二辰、建始庚寅。兌卦宜後離卦十二辰、建始庚申。

とあるように、乾卦が「1甲子」に建始してより十二辰を歴て、震卦が「13丙子」に建始する。巽卦は坤卦が「31甲午」に建始してより十二辰を歴て「43丙午」に建始する。艮卦は坎卦が「53戊寅」に建始してより十二辰を歴て「23庚寅」に建始する。兌卦は離卦が「64戊申」に建始してより十二辰を歴て「53庚申」に建始する。

乾（甲子）・震（丙子）の建始はともに「子」に対応し、坎（戊寅）・艮（庚寅）の建始は「寅」に対応し、坤（甲午）・巽（丙午）の建始は「午」に対応し、離（戊申）・兌（庚申）の建始は「申」に対応している。地支も天干と同じく子・寅・午・申の「陽辰」に対応しているのである。

このように京房の六十四卦構造は単に八宮に八卦を配属させているというだけではなく、六十四卦三百八十四爻に六十甲子を融合させた重層的構造として組みあげられているのである。そしてこのような六十四卦三百八十四爻を六十甲子という歴算構造に組みあげた構造の本来的狙いは、次に述べる積算にあった。

三 積算

積算とは卦の六爻を六十甲子に廻らせ、歳・月・日・時・節・候の運氣を定めて吉凶を占う占候の方法である。徐昂『京氏易伝箋』卷三に、

積算六位爻數、分陰陽配五行、定歲月日時節候運氣、以吉凶考休咎。計算自建月終結之干支起。如乾宮建月至己巳止、積算即起自己巳。從九五己巳推入上九爻世位壬戌、壬戌爲乾上九所納干支。上九建月干支爲甲子。廻轉九四戊辰。此六爻小周也。大周則六爻周而復始。

とあるように、積算の算出法は、前項でのべた建月法を前提とするもので、各卦の建月が終結する干支から開始される。

今、乾卦に例を取ってみよう。乾宮の建月は、甲子十一月から始まって己巳四月に終結する。積算は建月の終結する己巳四月より起り、六十甲子を一周して己巳四月前の戊辰三月（穀雨）に至って一周が完結する(6)。

その後、一周の終結した戊辰三月（清明）からふたたび周甲が繰り返されることになるが、その周回軌道を示すと次の通りとなる。

九五	己巳四月〜戊辰三月	第一小周（小積算）
九四	戊辰三月〜丁卯二月	第二小周（小積算）
九三	丁卯二月〜丙寅正月	第三小周（小積算）
九二	丙寅正月〜乙丑十二月	第四小周（小積算）
初九	乙丑十二月〜甲子十一月	第五小周（小積算）
上九	甲子十一月〜癸亥十月	第六小周（小積算）

大周（大積算）

以下、この六爻の周回軌道を図表化して示すと、△図表3▽八宮積算周回図①②のようになる。

そこで、これによって周回軌道をもう少し詳しく説明する。乾卦の建月が終わる時点にあたる九五己巳三月から推し進めて六爻を循環させると、戊辰三月に至って第一周が終わる。第一周の終結時点の九四戊辰よりふたたび六爻を循環させると、丁卯二月に至って第二周が終わる。次いで第二周が終わった九三丁卯より推し進めると、丙寅正月に至って第三周が終わる。次いで九二丙寅より乙丑十二月に至って第四周が終わる。さらに初九乙丑より甲子十一月に至って第五周が終わる。最後に上九甲子から押し進めて癸亥十月に至って第六周が終結することになる。以上が積算法の周回軌道である。それは、建月が終了する九五より推して順に遡り、もとの上九に至って六爻すべての積算が終わるというサイクルになっている。徐昂は各爻における周回を小周（本稿では小積算と呼ぶ）と称し、小積算を合わせた六爻全體の周回を「大周」（本稿では大積算と呼ぶ）と称している。このように小積算と大積算とを通じて完整的になる積算法とは、建月からの積層を経たのち、さらに最小要素たる爻のレベルから解析・拡張することによって卦爻・干支対応の積層のかつ膨大な循環構造を設定するものであ

つた。そして占候はそのシステムティックな法則性の上になされるものであつたといえるだろう。乾宮の他の残りの七卦に關しても、これとほぼ同様な論理によるが、これらについては次項において積算と納甲との關連を説明する際にも少し詳しく説明しようと思う。

四 積算と納甲

納甲とは簡単にいえば、「八卦に十干十二支を納入する」ということであり、八卦と干支の結合法として京房以前の古くから行われていたものである(7)。そしてこの納甲法は、京房易の中では、曆との關係において最も重要な要素をなすものであつた。『京氏易伝』下卷には、納甲の配当を次のように記している。

分天地乾坤之象、益之以甲乙壬癸。震巽之象配庚辛。坎離之象配戊己。艮兌之象配丙丁(8)。

これは八卦と十干との配当を記したものであるが、一方、十二支との配當に關しては、実は『京氏易伝』本文にはまとまつた記述がみえない。そこで徐昂説を見ると、彼は以下のように整理している。

「乾」内卦納子、由子而寅而辰。外卦納午、由午而申而戌。

「坤」内卦由未而巳而卯。外卦納丑、由丑而亥而酉。

「震」長子同乾。

「巽」長女則不同坤。内卦納丑、外卦納未。

「坎」内卦納寅、由是而辰而午。外卦納申、由是而戌而子。

「離」内卦納卯、由是而丑而亥。外卦納酉、由是而未而巳。

「艮」内卦納辰、推之午申。外卦納戌、推之子寅。

「兌」内卦納巳、推之卯丑。外卦納亥、推之酉未。(以上『京氏易伝箋』卷三「干支」による)(9)

そして、この記述にもとづいて八卦の各六爻を十干十二辰に配当してそれを図示すると、以下の△図表4Vのようなになる。

△図表4V 八卦と十干十二支配当

初爻	二爻	三爻	四爻	五爻	上爻	
甲子	甲寅	甲辰	壬午	壬申	壬戌	乾 ☰
乙未	乙巳	乙卯	癸丑	癸亥	癸酉	坤 ☷
庚子	庚寅	庚辰	庚午	庚申	庚戌	震 ☳
辛丑	辛亥	辛酉	辛未	辛巳	辛卯	巽 ☴
戊寅	戊辰	戊午	戊申	戊戌	戊子	坎 ☵
己卯	己丑	己亥	己酉	己未	己巳	離 ☲
丙辰	丙午	丙申	丙戌	丙子	丙寅	艮 ☶
丁巳	丁卯	丁丑	丁亥	丁酉	丁未	兌 ☱

まず、陽卦の乾・震・坎・艮には陽辰が配当され、陰卦の坤・巽・離・兌には陰辰が配当される。たとえば、乾卦では、初爻に子、九二に寅、九三に辰、九四に午、九五に申、上九に戌を配当し、初九の子に発して順次に寅・辰・午・申・戌と升る。その循環は子・寅・辰・午・申・戌と、十二辰の奇数辰としては順行である。

坤卦では陰辰が配当され、初六から順次に未・巳・卯・丑・亥・酉がそれぞれ配当される。すなわち、陰の六辰を逆に遡る序列である。このような配当法は、「陰は午よりし、陽は子よりす。子と午は分れて行る。子は左行し、午は右行す。左右は、凶吉・吉凶の道なり」(『京氏易伝』下巻)という記述によるものであるが、徐昂はこれを次のように改めて解釈し

ている。

乾六爻由子至戌。縦則順推而上。横則左行。坤六爻由未至酉。縦則逆溯而上。横則右行。此陰陽錯綜之道。

すなわち徐昂は、陽の循環を十二辰の始めに当たる「子」より発するものとし、陰の循環を十二辰の半分に当たる「午」に発するものとする『京氏易伝』本文の記述について「午」を「未」に改めているのである。その理由について徐昂は「坤は五月午に始まるも、因りて衝を避けて一辰を退き、未に貞す」と述べているが、要するに「午」は陽辰であるため、陽卦の爻辰に重なってしまうことを避けて、一辰を下げて陰辰の「未」に配当すべきであると考えているのである(10)。そして徐昂説にもとづくと、陽卦(乾・震・坎・艮)の「子」より発して順行することと、陰卦(坤・巽・離・兌)が「未」より発して逆行することが、一応八卦の十二支の配当と整合することになるのである。

それでは本題に入って、このような納甲法の配当とメカニズムは、前掲△図表3Vの積算構造とどのような関連をもつものであるのかを考えてみよう。

徐昂の言に、「九五己巳より推して上九爻世位の壬戌に入りて壬戌爲乾上九所納干支。上九建月干支爲甲子九四の戌辰に廻轉す」という箇所がある。これはまさに納甲法と積算法との関連を述べるものである。ふたたび△図表3Vに戻る。乾の建月より第一周列の下段の「6壬戌」に上九(6)が廻っている。この「壬戌」は、納甲における乾の上九に当たるものである。次の第二周列では「9壬申」に九五(5)があたり、第三周列では「6壬午」に九四(4)があたり、第四周列では「4甲辰」に九三(3)があたり、第五周列では「5甲寅」に九二(2)があたり、第六周列では「2甲子」に初九(1)が当たっている。そしてこれらの干支はまさに乾の納甲に一致しているのである。

八卦納甲法における干支の循環は、乾・震・坎・艮の陽卦には陽の干支が配当され、その循環は順行であり、一方、坤・巽・離・兌の陰卦は陰の干支が配当され、その循環は逆行であった。△図表3Vはその循環方向に従って、坤・巽・離・兌

の四陰卦を逆行させている。たとえば、坤卦の建月は、「31甲午五月」より起こって「38癸亥十月」に終わるので、積算は建月の終結する「癸亥十月」より起こるのだが、前項でも触れたように納甲法では、「坤は五月午に始まるも、因りて衝を避けて一辰を退き、未に貞す」（『京氏易伝箋』卷三）と、陽辰の午から陰辰の未に繰り下げている。したがって、坤・巽・離・兌の陰卦の、逆行する積算では、若干変則を加えることになる。

そこで、すでに見た乾卦を除く、他の七卦について見てみる。まず、坤卦免は建始の甲午より一辰退いて「32乙未」→「27庚寅」に建て、「27庚寅」より積算を逆方向に起こす。その結果、第一周列では、「10癸酉」に上六(6)、第二周列では「60癸亥」に六五(5)、第三周列では「50癸丑」に六四(4)、第四周列では「52乙卯」に六三(3)、第五周列では「42乙巳」に六二(2)、第六周列では「32乙未」に初六(1)が当たることとなる。そしてこれもやはり坤卦の納甲に一致するのである。

震卦は陽卦であるので、建月の終わる「18辛巳」より推して六爻を順行として周回させる。第一周列では、「4庚戌」に上六(6)、第二周列では「5庚申」に六五(5)、第三周列では、「庚午」に九四(4)、第四周列では、「庚辰」に六三(3)、第五周列では「27庚寅」に六二(2)、第六周列では「3庚子」に初九(1)が当たる。これもやはり震卦の納甲干支に一致している。

巽卦論は陰卦であるので坤卦と同じく、建始の「43丙午」より一辰を退き、「44丁未」より六爻を逆さまに組み立てる。建月の終わる「39壬寅」より推して六爻を逆さまに周回させる。その結果、第一周列では「28辛卯」に上九(6)、第二周列では「18辛巳」に九五(5)、第三周列では「8辛未」に六四(4)、第四周列では「58辛酉」に九三(3)、第五周列では「48辛亥」に九二(2)、第六周列では「38辛丑」に初六(1)が当たることになる。これもまた巽卦の納甲説干支に一致している。

坎卦黄は陽卦であるので、「15戊寅」→「20癸未」の建月をもとに積算を計る。建月の終結する「20癸未」より推して六爻を順次に周回させる。その結果、第一周列では「25戊子」に上六〔6〕、第二周列では「35戊戌」に九五〔5〕、第三周列では「45戊申」に六四〔4〕、第四周列では「戊午」に六三〔3〕、第五周列では「55戊辰」に九二〔2〕、第六周列では「15戊寅」に初六〔1〕があたる。これもやはり坎卦の納甲干支に一致している。

離卦間は陰卦であることから、建始の「55戊申」より一辰を退き「50己酉」より逆方向に建月を起す。建月の終結する「41甲辰」より推して六爻を周回させる。その結果、第一周列では「25戊子」に上九〔6〕、第二周列では「35戊戌」に六五〔5〕、第三周列では「45戊申」に九四〔4〕、第四周列では「55戊午」に九三〔3〕、第五周列では「55戊辰」に六二〔2〕、第六周列では「15戊寅」に初九〔1〕があたる。

以上、八卦中の乾・坤・震・巽・坎・離の六卦は、八圖表4Vの納甲法の配当に一致した結果が得られる。ところが、残りの艮・兌の二卦が八圖表4Vの納甲干支に一致するものではない。艮卦は天干「丙」をもとに陽辰（子・寅・辰・午・申・戌）を廻らし、兌卦は天干「丁」をもとに陰辰（未・酉・亥・丑・卯・巳）を廻らして、八卦全体における納甲からすれば、完成された配当といえるが、しかし、八圖表3Vの積算に対応するものではないのである。こういった食い違いが生ずるのか、その理由については現段階では未詳とするしかない。

しかし、八卦中の六卦において積算のメカニズムが納甲法における配当と一致しているという事実は、決して偶然とはいえない。つまり『京氏易伝』における「積算」と「納甲」とは、実は同一原理の上に成立するものである可能性がかなり大きいと考えられる。これまでの京氏易に関する研究では、納甲法は八卦と十干十二支との単線的な配当として説明されてきた。しかし、その実は積算法にみるような壮大かつ合理的な歴算構造の上に成立するものであった。すなわち、歴算の法則性を八卦の占候法として見出したのが納甲法であったのではないかと考えられるのである。

六十甲子とは言ってみれば、虚数的時間概念である。つまり、その時間概念の中味には実体としての時間が詰められていない。名称としての、あるいは形而上的な時間である。実体的時間に関与しないという虚数的時間性のゆえにこそ、歳・月・日・時におけるすべての時間的概念を六十甲子の中に包括させることが可能となるのである。そして積算法とはまさに、易の六十四卦三百八十四爻を六十甲子に組み込むことによって、無限に広がる時間構造の構築を試みたものであったといえるのではないだろうか。その点について徐昂のいう所を見てみる。

循環十轉。天干六周、地支五周。六爻循環、轉至第二次、地支方達一周、至於周甲。以歲月日時計之。每爻周轉各十數。

計時每爻十時、計日每爻十日、計日每爻十月二十節、計歲每爻十年。（『京氏易伝箋』卷三）

すなわち、まず、一爻の小積算における廻転数が、十轉すなわち十周期が算出されることを説く。それは、六爻と六十甲子との数値的關係からもただちに理解できるように、起積より一周が終るまで、天干は六周（たとえば、6己巳、16己卯、26己丑、36己亥、46己酉、56己未）し、地支は五周（たとえば、6己巳、18辛巳、30癸巳、42乙巳、54丁巳）するからである。一卦の六爻（123456）は、六十甲子を十轉する。たとえば、乾卦においては、6己巳〜11甲戌（一轉）、12乙亥〜17庚辰（二轉）、18辛巳〜23丙戌（三轉）、24丁亥〜29壬辰（四轉）、30癸巳〜35戊戌（五轉）、36己亥〜41甲辰（六轉）、42乙巳〜47庚戌（七轉）、48辛亥〜53丙辰（八轉）、54丁巳〜59壬戌（九轉）、60癸亥〜4戊辰（十轉）と、六十甲子を周回し終わるまで十周期を経るのである。これを時数で言えば、一爻十時間、日数でいえば十日、月数でいえば十ヶ月、年数でいえば十年をもつて周期を形成することになる。陸績注に「吉凶の兆、年を積みて月を起こし、「月を積みて日を起こし」日を積みて時を起こし、時を積みて卦を起こして本宮に入る」（『京氏易傳』卷上「乾」陸績注）というのは、この積算法における時間の並行的積み上げ關係を述べたものであった。そして徐昂はさらにつづけて次のように説く。

積算廻轉一年爲一周者。陶以十二地支爲準。依所冠之天干計算一周也。如乾由己巳廻環至戊辰、以月計之、須經六十月。(『京氏易伝箋』卷三)

すなわち、小積算によって地支は五回の廻転を行うが、それは五年(六十月)を経ることになる。したがって、一卦の大積算によって三十年という周期が得られることになる。そしてこの大積算はさらに無限に繰り返されることが可能である。京房の積算法とは、たんに一年の暦日に対応させられただけの、閉じられた六十四卦のシステムではなく、六十四卦三百八十四爻という易数を、年月日時における無限に開かれた宇宙論的な時間構造として組みあげたものだったといえよう。

五 おわりに

以上、『京氏易伝』の積算法について「八宮世應組織」「建月」「積算」「納甲」という四つの枠組みにおいて論じた。従来は、いずれも『京氏易伝』にみえるこれらの技法について、並行的に説明するに止まり、それら相互の関連性については明らかにされなかった。しかし、これらの技法は決して別々に創案されたものではなかった。本稿はその最終的・完整的な論証に至るものではないが、しかし、おそらくこれらの占候法は統一的な原理の上で成立しているものと推測される。すなわち、『京氏易伝』の八宮六十四卦の卦序構成は、実は「積算」という、無限の時間的循環構造の上に秩序づけられたものであり、その時間的変化の規則性を基盤に構築された占候法が納甲法であったのではないかと考えられるのである。

注

(1) 『馬王堆漢墓帛書周易』と『京氏易伝』における卦序構成の関連性については、韓仲民『帛易說略』（北京師範大学出版社、一九九二年十月）、拙稿『『帛書周易』の卦序構成における「象」と「数」』（『中国文化—研究と教育』漢文学会会報第五十五号、一九九九年六月）を参照。

(2) 民国の徐昂著『京氏易伝箋』は、これまで明らかにされてこなかった『京氏易伝』における様々な技法を、非常に具体的に追及したものであり、『京氏易伝』を読む人にとって必須の参考資料であると思う。ただ徐昂の『京氏易伝箋』は、今日それほど知られていない。徐昂（一八七七年—一八五三年）は、江蘇省南通の人で、字亦軒、号益修、南菁書院で学業を修め、易学の他に音韻学にも精通した。『京氏易伝箋』は、民国二十八年六月（一九三九年）、徐昂六十三才の時に書かれたものである。『京氏易伝箋』は、全部で三巻に分かれ、巻一・巻二では『京氏易伝』上・中二巻の解説を行っている。ただ、巻三は下巻の解説ではなく、『京氏易伝』の易論・易説を項目別にとりあげ、その理論的解説を行ったものである。その「自序」において、「人心の古からざれば、蓋し消長得失の機を明らかにするが若き者鮮し。昂、好んで漢易を治め、敢えて衰邁謙陋を以て自ら其の知を闕す^{とす}。乃ち卦體・象數・消息・飛伏・世應・建候・積算・星宿・氣候・變動・周流の道に於いて展卷握管す」と、『京氏易伝』の様々な技法に対する理論的分析を行ったことを主張している。ここに列挙されている技法は、実際は互いに緊密な関係をもっているものであるが、本稿ではその中からとくに「建候」「積算」という二つの問題に重点をおき、敢えて他の関連説には触れない。なお、徐昂の『京氏易伝箋』を用いた京房易の研究として、盧央『京房評伝』（南京大学出版社、一九九八年十二月）がある。

(3) 拙稿『『帛書周易』卦序構成における「象」と「数」』（『中国文化—研究と教育』第五五号、一九九七年六月）

(4) この六十甲子・二十四氣・五行の対応関係については陸續注を参照した。

(5) ただ、巽宮と兌宮の建月に關しては、やや説明を加えておかなければならない。巽卦は『京氏易伝』の原文によると、巽卦の建始は辛丑(十二月中の大寒)く丙午(五月節の芒種)、兌卦の建始は乙卯(二月中の春分)く庚申(七月節の立秋)とあり、後の七世卦の建始も建月法の凡例にしたがう。徐昂は「兩宮皆以建始爲終訖。將謂陰宮逆行耶。何以坤離不逆而獨逆巽兌也」と述べ、それをあらためている。本稿ではこれに従うことにする。

(6) 「積算之法、從其所建結末之干支計起。如乾建甲子至己巳。積算即從己巳計起是也。積算從己巳四月節立夏、至戊辰三月中殺雨」

(7) 鈴木由次郎『漢易研究』(明德出版社、一九七四年三月)に、『京氏易伝』の納甲法が詳述されている(二〇七頁く二二六頁)。鈴木氏はその出典については特に触れていないが、その記述と論証は、ほぼ『京氏易伝箋』によつたものと思われる。

(8) 陸續注に「乾坤、天地陰陽の木を二分す。故に甲乙壬癸にして陰陽の終始を分かつ。庚陽は震に入り、辛陰は巽に入る。戊陽は坎に入り、己陰は離に入る。丙陽は艮に入り、丁陰は兌に入る」とある。さらに乾坤と甲乙壬癸との配合に關しては「甲壬外内二象に配す」(『京氏易伝』上卷「乾」とあるように、内卦・外卦に分かれて配当される)。

(9) この奇妙な循環構造について徐昂は「八卦主乾坤。乾卦由初爻至上爻、爲子寅辰午申戌。震卦同乾。坎卦從上爻廻轉初爻至第五爻。艮卦由第五爻至上爻。再廻轉初爻至第四爻。皆乾之子寅辰午申戌也。坤卦由初爻至上爻爲未巳卯丑亥酉。巽卦由第四爻至上爻。再廻轉初爻至第三爻。離卦由第五爻至上爻。再廻轉初爻至第四爻。兌卦由上爻廻轉初爻至第五爻。皆坤之未巳卯丑亥酉也」と説明しているが、しかし、これらは主に以上の事情を説明的に説くものにすぎない。

(10) 鈴木も徐昂の説に従っている(鈴木前掲書の二二三頁く二二六頁を参照)。